



2019年1月10日

# JACET-Chubu Newsletter

一般社団法人 大学英語教育学会中部支部 No. 41

## 平成30年度中部支部大会報告 —大学英語入試で何を測るべきか—

支部長 村田 泰美  
(名城大学)

平成30年度JACET中部支部大会(第34回/2018)は愛知県及び名古屋市各教育委員会の後援を得て、2018年6月16日(土)に愛知大学名古屋校舎において予定通りに開催されました。このキャンパスは名古屋駅から至近に位置し、建物も設備も真新しい都市型キャンパスであることは会員の皆様もよくご存じのことでしょう。

2018年度の大会のテーマは、「大学英語入試で何を測るべきか」とし、新しい学習指導要領とそれに伴う高大接続教育への観点から見直しが進められている大学入学試験について、情報を得る機会にしたいと考えて企画致しました。

支部大会の特別講演には、民間試験を入試に導入することについて多く発信されている鳥飼玖美子教授(立教大学)をお迎えし、「大学入試と英語民間試験: 課題が生み出すもの」という題でお話頂きました。続くシンポジウムでは第1部として民間試験導入を見据えて準備を進めている日本英語検定協会から塩崎修健氏が「大学入試改革に伴う英検協会の取り組み」、静岡産業大学の法月健先生が「大学英語入試改革の論点: 4 技能測定の意義と評価」という題で話題を提供してくださいました。その第2部では藤原康弘先生(名城大学)がモデレーターとなり、鳥飼先生を交えた3名のシンポジストとともに、フロアからの参加も多く頂きながら、「大学入試の改革」について活発な質疑応答や意見交換の場を作ることができました。このシンポジウムの報告は本年度刊行予定の『JACET 中部紀要』第16号(2018.12)に掲載されますので、参加できなかった会員の皆様はぜひそちらをご参照ください。事務局からの報告によりますと、2018年度の支部大会の総参加人数は131名です。これは例年と比べて多い参加者人数で、大学入試に関して会員の皆様が高い関心を持たれていることが分かります。さて、少々気が早いのですが、2019年度

### 目次

平成30年度中部支部大会報告 村田泰美	1頁
<u>講演会報告1</u> 鳥飼玖美子氏「大学入試と英語民間試験: 課題が生み出すもの」 安達理恵	2頁
<u>講演会報告2</u> 佐渡島沙織氏「アカデミック・ライティング とその支援—早稲田大学での取り組み」 佐藤雄大	4頁
<u>研究会報告</u> 最新言語理論に基づく応用英語文法研究会 大森裕實	5頁
<u>海外学会報告</u> 2018 KATE International Conference: Locally Appropriate Language Pedagogy in the Post- method Era 佐藤雄大	8頁
事務局より	9頁

の JACET 国際大会について少し宣伝させて頂こうと思います。2019 年度国際大会は 8 月 28 日から 30 日まで名古屋工業大学で開催されます。テーマは「Beyond 'Borderless' English Education in a Changing Society」『ボーダーレス』の先に変革する社会における英語教育」となりました。実は Borderless とは国境のことばかりではありません。技術革新や、バイオの先端研究によってさまざまな分野や物の世界で境界が曖昧になってきていることを指すものです。社会のニーズが変わり、人の感性も変わり、AI の進歩とともに、人間と機械の border まだが変わりつつある近未来を見据えて、英語教育を考えてみようという主旨です。

たとえば、今欧米で人気のイスラエルの歴史学者、ユヴァル・ノア・ハラリ氏は近い将来の見通しを次のように語っています。「2045 年に人口知能が人間の知性を追い抜く。あらゆるところにロボットが使われ、人間の働く場が狭まっていく。その理由はコンピューターが「賢く」なるからだ。つまりシリコン系半導体のコンピューターに替わる量子コンピューターでは処理速度が格段にあがり、人間が考えること、思うことが、全て AI のアルゴリズムで処理できるようになるからだ。」そのような世界の中で人間の言語の役割はどうなるのでしょうか。英語を含む外国語教育の意味はなくなるのでしょうか。私は AI は最適解を求めることは得意でも、「問い」を見つけることはできないのではと考えています。そして「問い」は人間が他とのつながりを考える時に出てくるものだろうと思うのです。哲学的な話になりますが、「ことば」を持ち、そして他の誰かの「ことば」を学ぶことの意味は「つながり」にあり、それが人間の

存在の意義であるとしたら、外国語教育の意味もなくならないはずだと考えます。さて、会員の皆さんは近未来の英語教育について、入試改革も含めてどのようなお考えをお持ちでしょうか。ボーダーが融解していく社会における英語教育を名古屋工業大学と一緒に考えてみませんか。たくさんの会員の皆様にお会いできますことを祈りつつ、報告とさせていただきます。

## **講演会報告 1**

**第 34 回 (2018 年度) 中部支部大会**

**特別講演**

**「大学入試と英語民間試験：  
課題が生み出すもの」**

**鳥飼 玖美子 氏**

**(立教大学)**

**2018 年 6 月 16 日**

**(於：愛知大学 名古屋校舎)**

氏によると、大学入試への民間試験導入の考えは、1980 年の臨教審(中曽根氏)ですでに出ていた。これは政府主導の初めての教育改革であった。その後、2 次答申で日本の英語教育の成果が生まれず、文法訳読方式の英語教育に課題がある、として 1989 年に学習指導要領の改訂につながった。課題解決策として、コミュニケーションのための英語教育が必要、ということで、英会話に主眼が置かれるようになった。そして、新学習指導要領では、小学校での英語教育や大学入試に民間試験導入が取り入れられた。

しかしながら、学習指導要領には「コミュニケーション力」の明確な定義はない。曖昧なまま、大学の英語教育も会話力重視になってきた。同様にスーパーグローバル

大学も、TOEFL® などの外部試験の点数を上げることが施策に明記されないと採択されなかった。しかし民間業者が大学入試に参入する道は、前文科省大臣の下村博文氏や教育再生実行会議のメンバーの楽天の三木谷氏などの意見により明確になっていった（当初三木谷氏は TOEFL® だけに固執したがさすがに通らなかった）。なお認定民間業者 7 種類のうち、日本英語検定協会のみ入らなかったのは試験期間が 2 日以上あったため。国語や数学の記述式の問題は、かなり課題が散見されているのに、英語のスピーキング力もどのように測定するのかについては相当検討すべき課題があろう。東大は、民間試験を合否判定に使わない、と副学長が発表した（十分学内での周知がなかったこともあり）、WG で検討することになった。（その後、東大は基本的には採用しないことになった）。

民間試験では、教育目標を明確にしない、集団基準準拠テストであるため、教育目標を明示してそれに向かって試験をする教育のための目標基準準拠テストとそぐわないと考えられる。また CEFR の評価基準である CAN-DO 記述文は、「できる」という表現であり、総合的に言語力を評価するものなので、5 技能のそれぞれの達成度がバラバラになるのは当然で、達成目標とは異なる。

民間入試導入の課題としては、①採点の透明性が必要だがそれが明らかでない、②スピーキングテストの測定が難しい（試験の妥当性（実施毎による違い）、採点者のぶれや曖昧な基準（話す内容、話し方 etc.）、試験種類の測定の違い）、③高校の英語の教育目標が民間試験対策になってしまう（学習指導要領との整合性）、④試験料金が高額のため保護者の経済力による影響大、⑤受験できる場所によって地域格差が生まれる（交通費や時間が大きく異なる）。そもそもコミュニケーション力については、これまで明確に定義されておらず、高校での学習内容でそれをカバーしようとするのは無理があろう。社会言語能力や方略能力などの部分は評価しにくく、高校で育成することは難しい。コミュニケーション力は、場やコンテキスト、相手次第に変化するものなので、パターンを暗記して育成することはできない。会話力は大学で育成すべきであろう。

また AI（人工知能）が翻訳や通訳の分野でも注目されているが、簡単な「会話のようなもの」なら可能だろうが、AI は相手次第で変化する、真の意味でのコミュニケーションをするわけではない。自ら本を読んで、理解して、解釈して、意見をまとめることもできない。だからこそ AI はできない力、読む力や相手に応じて適切にできる

	<b>Writing Key</b> <b>English Grammar and Usage for Better Writing</b>
	英語の感覚をつかむ文法からライティングへ
	北尾泰幸 / Anthony Allan 著
	文法のエッセンスを良質のインプットで吸収！ 英語の感覚を磨き、自然な英文を書くための 15 章
	¥1,800 (税別) B5判 68 pp. 全 15 章 ISBN978-4-7647-4086-0
	 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 3-21 電話 03-3263-3828 FAX 03-3263-0716 text@kinsei-do.co.jp http://www.kinsei-do.co.jp

コミュニケーション力を教育において育成すべきであろう。

鳥飼氏のお話を伺い、個人的な感想であるが、民間試験丸投げは、高校での英語教育を実施する教員の権利と義務を放棄することになってしまうと思えた。確かにスピーキング力の育成は鳥飼氏も述べていたように重要とは私も考える。しかし、小学校英語教育でも全く同じことが言えるのだが、一言でいうと「まだ社会環境が整っていない」のだ。何万人もの受験生のスピーキング力を測定する試験官は不足し、スピーキング力といっても単なる会話なのか、コミュニケーション力を測定するのか十分な議論もないまま、拙速に民間試験の結果を大学入試の判定基準としてしまうことは課題があると言わざるを得ない。そもそも公的資金節約のため民間に委ねるといことは、試験の質が落ちる可能性も大きい。また親の所得や地域格差、会話時に何等かの障害をもつ生徒への対応は、2020年には間に合わないだろう。また、氏の言うように、今までのセンター入試のどこが問題かについては、十分検討されていないことも問題である。よって、現状の入試制度をもう少し維持し、国の英語教育施策として目指す、コミュニケーション力について統一した見解を示してからでも、スピーキング力を測定するのは遅くないと考える。社会状況や生徒の学習環境に見合った教育の評価方法を重視すべきであり、地方や観光地のない地域に住み、話す機会が日常生活でほとんどない生徒のスピーキング力までも評価するのは、日本では時期尚早と思えた。

安達 理恵 (愛知大学)

## 講演会報告 2

中部支部 2018 年度秋季定例研究会

特別講演

「アカデミック・ライティングと  
その支援—早稲田大学での取り組み」

佐渡島 沙織 氏

(早稲田大学 国際学術院 教授)

2018 年 11 月 18 日

(於：名古屋外国語大学)

佐渡島沙織先生は日本の大学ライティング・センターの草分け的存在である早稲田大学アカデミック・ライティング・プログラムの部門長として 2004 年の開室当時から組織を率い、現在まで出版を含めて理論・実践双方で日本のライティング・センター活動を牽引されてきた研究者の方です。私は科研費調査（研究代表：木村友保「日本人のための英語ライティング・センター構築の可能性とその実現計画」2012-2014 年度）の一環で 2012 年 10 月に早稲田大学のライティング・センターを訪れ、大学院生を中心としたチューターの会議や実際のチューターが学部生に指導している場面を見せていただき、文系・理系が混在する中どのようにライティングのサポートを行っているかなどを間近で見ることができた経験があり、今回の講演でもそうしたライティング・センターの役割・実際などを含めて詳しくお話を聞くことができました。

現在のライティング・センターはもともと 1950 年代からあったようですが、1970 年代米国で盛んとなった「カリキュラム全体でライティングの指導に取り組んでいく」ことを目指した *Writing across the curriculum* という動きが広まり、そのアカデミックな体制をサポートするためにライティング・センターが米国のほとんどの大

学で設置されるようになったそうである。実際佐渡島先生もご自身が米国に留学したイリノイ大学でライティング・センターを頻繁に利用し、そのことがその後のライティング・センター運営にも生かされているということでした。

早稲田大学を含めどのライティング・センターでも学生のライティングをサポートするとき強調されるのが「書きあげるまでの過程」を大切に扱うことであるということでした。これはライティング指導の世界だと「プロセス・ライティング」という考え方と一致する指導理念です。完成を何らかのモデルに当てはめていくライティングでは形だけ整えて「思考が伴わない」活動となります。そうではなく書き上げるまでの推敲などの「書く過程」をしっかりと行うようにサポートし、「書き手が考えながら書く」ことを学ぶことが重要であると考えられるライティングの指導法です。早稲田のライティング・センターでも「書くことは考えること」であることを意識づけることがライティング・センターの役割であり、その結果「自律した書き手を育てる」ということが使命であると佐渡島先生は指摘されていました。

早稲田大学（学部生約 5 万人、院生約 7 千人）のライティングプログラムはオンデマンドの授業（年間約 4900 人ほどの履修）運営と対面式にライティング・センターの運営（年間約 3700 セッション、1 セッション 45 分）二つが管轄となり、チューターはすべて院生で現在 30 名で対応しているということでした。マンモス校ならではの問題もあるようですが、チューター育成をかなりしっかりやっていることによって 15 年目を迎えるライティング・センターも順調に稼働しているということでした。この

ような話を聞き、さらにこの中部地区の高等教育機関におけるライティング・センター設置の重要性を再認識すると同時にライティング指導による学習者の力を向上させる可能性も改めて確認できた講演でした。

佐藤 雄大（名古屋外国語大学）

## 研究会報告

### 最新言語理論に基づく

### 応用英語文法研究会

#### SIG on Applied English Grammar based on the Latest Linguistic Theories

本研究会では、機能主義言語学、認知言語学、語彙意味論、生成文法理論、コーパス言語学などの知識を英語の学習・教育に応用できるように加工し、従来の学習英文法では一面的に捉える傾向が見受けられる文法現象や構文に対して、多面的アプローチによる説明と導入の可能性を探究することを研究テーマとしている。それを実現し、応用する分野として、大学英語教育における英語教員養成にも着目し、実際に英語を教える状況において、その支柱となる英語力の涵養を支援する学習英文法を開発することを視野に含めて、研究会活動に取り組んでいる。その成果として、2014 年度より 5 年間連続して、JACET 国際大会において以下のテーマ&内容でシンポジウムを企画・実施してきた実績がある。

第 1 回目（2014 年度）：JACET 第 53 回国際大会（広島市立大学 [2014.08.28]）では、「言語理論の学問知を生かした英語教育—English Education Activated by New Grammatical Knowledge and Linguistic Insights」というタイトルで、①機能主義的言語観に基づき、文法的範疇（Grammatical

Category) と概念的範疇 (Notional Category) のズレを中心に、「話しことばの文法 (書きことば文法規則を超える強勢の移動)」について、また、英語の心を理解する「空間言語学」の応用について；②語彙意味論、フレーム意味論などで得られた研究成果を、どのように活用することにより、学生の英作文に見られるコロケーションの間違いを修正し、英語で表現する力を高めていくことができるかについて；③認知言語学と親和性が高い授業実践 (Image Grammar for Communication) 授業について、受講生のコメントシートの内容を紹介しながら、英語データの蓄積がある学習者にとっては、認知言語学的な説明は、これまでの理解をより深め、体系化することに役立つ感があることについて報告し、問題提起した。

第2回目 (2015年度) : JACET 第54回国際大会 (鹿児島大学 [2015.08.29]) では「大学言語教育観に適應する多元的学習英文法の新展開—New Perspectives on Development of an English Grammar for Learning in the Advanced Language Education」というタイトルで、①発話を意識した文意の違いを文法の一部として学習するために、A Communicative Grammar of English を参考に、音声情報記述による practical grammar を検討；②生成文法の知見と文末焦点などの情報構造の考えを導入することにより、英語母語話者が持つ英語の感覚を学習者に理解させる術について考察；③メタファー、精緻度 (granularity) の調整、フレーム知識などの認知言語学の道具立てから、英語をより深く、高校までとは違った視点から眺めることで、学習者が英語学習に対して「楽しく」(enjoyable)、「有益」(valuable) であるという意識を持ち、英語学習のプロセス自体に関心を持ち、動機づけることを

受講生のコメントにも触れながら紹介した。

第3回目 (2016年度) : JACET 第55回国際大会 (北星学園大学 [2016.09.02]) では、「言語研究の複眼的視点から考察する関係節の効果的学習法—Effective Approaches to “Relative Clause” from Multiple Viewpoints of Language Studies」というタイトルで、関係節の指導法に焦点を当て、①歴史的観点も視野に含めて、現代英語の関係節の文法的特徴と変異を概観するとともに、英語読解 (精読) 授業で得られたデータの質的分析から、最近の大学生 (中上級熟達者) が英語能力試験のリーディング部門で高スコアが獲得できない一因が「関係詞節を随伴する複文構造の不十分な理解」にあることを明らかにした；②関係節及び後置修飾の学習に関して、認知言語学のアプローチに基づく教授法を施したグループと生成文法のアプローチを適用したグループの理解度調査の結果を示しながら、どちらのアプローチがより関係節及び後置修飾の理解度を深められるかについて分析した。加えて、関係節・後置修飾の中には、認知言語学と親和性が高い文法項目あるいは生成文法で捉えやすい文法項目といった理論と教授法の適合性があることを示し、その理由について理論的な面と実証的な面から分析し、両理論を絡めた効果的な関係節及び後置修

### 子どもと始める英語発音とフォニックス

●山見由紀子/赤塚麻里/久保田一充●

#### 英語教師を目指す学生の必読書

小・中学校の英語教育で導入され注目を集めているフォニックスを見やすく、わかりやすく説明した一冊です。音声学の観点からの説明と、付属の音声、動画 (無料ダウンロード) で学習者自身の発音改善が期待できます。



B5判 (100) CD付 定価 (本体 2200 円 + 税) 978-4-523-26555-9



株式会社 南雲堂

〒162-0801 東京都新宿区山吹町 361  
TEL: 03-3268-2311 / FAX: 03-3268-2486  
E-mail: nanundo@post.email.ne.jp

NAN'UN-DO

飾の指導法について提案した。

第4回目(2017年度): JACET 第56回国際大会(青山学院大学 [2017.08.30])では、「理想的教職課程履修生(英語)に求められる言語知識—一言語理論・第二言語習得論からの提案—What Ideal Teacher-Trainees of English should Know about the Language: Suggestions from the Perspectives of Linguistics and SLA Theory」というタイトルで、①教員養成のための「コア・カリキュラム試案」にも明記された「音声文法」(文法は書き言葉だけを射程に含む概念ではなく、話し言葉にもその原則的ルールが存在すること)の再確認と国際化時代の英語 Pedagogy に必須の重点事項について、また、歴史言語学の観点から、英語史知識が音韻形態(語彙)の理解に貢献することを提示; ②認知言語学の観点(日常言語の中の比喻の理解)から、これまで単なるルールの暗記として扱われてきた項目を採り上げ、ある表現がなぜそのような表現になるかという意味づけを行うことで、英語感覚を身につける方法を紹介; ③第二言語習得論の観点から、基本的な言語習得メカニズム、第一言語習得と第二言語習得の違い及び臨界期仮説を簡単に紹介した上で、第二言語習得に影響を及ぼす内的要因及び外的要因(causal factors)を採り上げ、学習者理解のために「英語習得・学習における主な why」の答えを提案した。

第5回目(2018年度): JACET 第57回国際大会(東北学院大学 [2018.08.29])では、「理想的英語教員に求められる「時制」に関する知識—What Ideal Teachers of English should Know about Tense based on New Approaches」というタイトルで、時制と相に焦点を当て、①時制を汎言語的に扱った好著 Comrie, *Tense* (1985) に基づき、

「参照点構造」とテンスの2区分(「絶対テンス」と「相対テンス」)について捉え直し、ESPとしての翻訳(文法訳読方式)を通して英語の理解を図る場合に問題となる「日英両語の時制表現の相違」を克服する視点と方法を提示; ②語彙意味論の観点から、学習者が完了相や進行相を用いる場合に、従来学校文法に頼ってきたところを、動詞のアスペクト素性(語彙的アスペクト)を表す語彙概念構造(LCS)の基礎的な分析を基にして、個々の動詞が表す事象の完了相と進行相の捉え方を再認識することを通して、学習者がどのように的確な英語構文を組み立てることができるかを提言; ③認知言語学のグラウンディング理論から、従来「現在完了進行形」、「未来完了進行形」、「仮定法過去完了」と別の項目で扱われていた項目を、事態を「事実」と捉えるか、「予測・推測」と捉えるかというグラウンディングの仕方の違いを参照したカテゴリー化を行った。

最近開催された第1回 JAAL in JACET 学術交流集会(高千穂大学 [2018.12.01])においても、ポスター発表「応用英語文法—〈構文〉〈関係節〉〈時制〉の攻究」を行い、精力的に活動している。今後は通訳翻訳技法とのインターフェイスも射程に含めて攻究したい。

大森 裕實 (愛知県立大学)  
今井 隆夫 (副代表)

## 海外学会報告


### 2018 KATE International Conference: Locally Appropriate Language Pedagogy in the Post-method Era


2018年7月6日～7日、韓国ソウルにある淑明女子大学校を会場とした KATE (Korean Association of Teachers of English) の 2018 KATE International Conference に参加・発表した。これは KATE が JACET の学術交流提携学会であり、JACET の理事として派遣されたものだが、レセプションや発表などを通じて KATE の会長である Lee Young Shik 氏をはじめ様々な学会メンバーの人と話す機会があり、大変盛り多いものであった。

今回 2018 KATE International Conference のテーマは「Locally Appropriate Language Pedagogy in the Post-method Era」で、より現場、教室を基盤とした英語教育の実践・研究発表が行われた。大会は二日間の日程で、参加者総数 250 名、発表件数 88 件であった。日本からの参加者はほとんど無く、印象としては韓国の初等教育～高等教育機関まで幅広い英語教育の実践研究発表が多いような印象を受け、また英語圏の大学院に留学している（していた）大学院生の発表もある程度あった。私は「Active learning has a

potential to change English education in Japan: what is required for English teachers」と題して、日本での英語教育、特に近年注目を浴びているアクティブ・ラーニングの現状とそれを英語教育の中に取り入れる際留意すべきことを心理学者のヴィゴツキーと脳科学者のダマシオの知見に基づいて紹介した。発表のはじめに韓国の教育界でアクティブ・ラーニングは話題となっているかどうか質問したところほとんど反応がなく、日本と韓国のアクティブ・ラーニングに対する温度差に少し驚いたことを記憶している。発表内容やコミュニケーションを重視したヴィゴツキーの考えについては評価され、いくつか質問もあり議論を深めることができた。また二日目には JACET の寺内一会長も参加され、招待発表として JACET と KATE の交流経緯に触れ、長きにわたる両学会の交流についてふり返り、これからの展望について述べられていた。

7月5日の大会前日に行われた提携団体招待者のレセプションに招かれ、そこで Thai TESOL、MELTA (Malaysian English Language Teaching Association)、TEFLIN (The Association for the Teaching of English as a Foreign Language in Indonesia) の招待者らと食事をしながら歓談したことも各国の教育状況や研究動向を知る上で重要な機

		<b>成美堂 2019 年度 新刊のご案内</b>		〒101-0052 東京都千代田区神田小川町 3-22 TEL 03-3291-2261 / FAX 03-3293-5490	
New Connection Book 3	2,200 円(税別)	Meet the World 2019 -English through Newspapers-	2,000 円(税別)	World of Wonders: A Brave New World	1,900 円(税別)
Let's Read Aloud & Learn English: On Campus	2,200 円(税別)	Medical Front Line	2,500 円(税別)	Talking with Your Patients in English	2,500 円(税別)
Science Explorer	1,900 円(税別)	English for Student Pharmacists 2	2,800 円(税別)	Fundamental Science in English II	2,000 円(税別)
Go Global -English for Global Business-	2,400 円(税別)	小学校英語科教育法-理論と実践-	2,800 円(税別)		
Travel English at Your Fingertips -Revised Edition-	1,900 円(税別)				
CBS NewsBreak 4	2,400 円(税別)				
Discovering Cool Japan	2,500 円(税別)				
AN AMAZING APPROACH TO THE TOEIC® L&R TEST	2,200 円(税別)				
ESSENTIAL APPROACH FOR THE TOEIC® L&R TEST	2,000 円(税別)				
-Revised Edition-	2,000 円(税別)				

株式会社 成美堂  SEIBIDO  
●書籍の情報はホームページでもご覧になれます。  
URL: <http://www.seibido.co.jp> e-mail: [seibido@seibido.co.jp](mailto:seibido@seibido.co.jp)



会であった。レセプションで話した招待者たちとはその後会場で会って話すことができるような関係を作ることができ、提携学会との交流が学術研究のひとつとして役割を果たしていることを実感する機会でもあった。

佐藤 雄大 (名古屋外国語大学)

#### 掲示板

『JACET 中部支部紀要』第 17 号への掲載論文の投稿 (学術論文、研究ノート、実践報告、書評) を募集します。ぜひ奮ってご応募ください。

締切: 2019 年 9 月 10 日

刊行予定: 2019 年 12 月

掲載料: 刷り上がり 1 ページにつき、  
1,000 円の負担

長さ: 研究論文 23 ページ以内、実践  
報告・研究ノート 15 ページ以  
内、書評 5 ページ以内

問合せ: JACET 中部支部事務局

投稿規程など詳細は、ホームページや  
紀要最終ページでご確認ください。

中部支部紀要編集委員会

### 事務局より

#### ◆ 2018 年度春季定例研究会のお知らせ

2018 年度春季定例研究会を 2019 年 3 月 2 日 (土) に名古屋工業大学で行います。詳細は 同封のプログラム、および支部ホームページをご覧ください。

#### ◆ 新入会員のご紹介

2018 年 6 月から 2018 年 11 月までの中

部支部 所属新入会員は以下の方々です。  
(敬称略、入会順)

ファロン トーマス (名古屋学院大学)、  
尾上 麗子 (愛知学泉大学・愛知学泉短期大学 [非])、ロンバルディ イヴァン (福井大学)、マルソ エティエン (名古屋外国語大学)、染谷 藤重 (東京学芸大学連合大学院 [院])、ジェントリー レジナルド (福井大学)、松浦 千佳子 (名古屋工業大学)、モルナー ジョン アンドラス (金城学院大学)、藤田 賢 (愛知学院大学)

#### ◆ 支部長選挙開票結果

11 月 17 日 (土) に名古屋外国語大学で開催された第 2 回中部支部総会で、2019 年度中部支部長選挙の開票結果について報告がありました。11 月 6 日 (火) に投票を締切り、11 月 10 日 (土) に田中春美選挙管理委員長のもとに開票が行われました。開票結果は、以下の通りです。

・ 投票数	104 票
・ 石川 有香 候補	60 票
・ 佐藤 雄大 候補	38 票
・ 無効	6 票

次期支部長は石川 有香 氏 (名古屋工業大学) となりました。副支部長は佐藤 雄大 氏 (名古屋外国語大学) です。任期は 2 年となります。

#### ◆ 2018 年度第 2 回 JACET 中部支部 総会報告

11 月 17 日 (土) に開催された第 2 回 JACET 中部支部総会で 2019 年度事業計画及び予算案・人事案が了承されました。正式就任は 2019 年 6 月定時社員総会后、任期は 2 年になります。

## 2019 年度 中部支部役員 (敬称略)

### 顧問

田中 春美 (南山大学名誉教授)、  
吉川 寛 (中京大学)

### 理事・支部長

石川 有香 (名古屋工業大学)

### 副支部長

佐藤 雄大 (名古屋外国語大学)

### 支部事務局幹事

伊東 田恵 (豊田工業大学)

### 支部会計幹事

三上 仁志 (中部大学)

### 支部研究企画委員

安達 理恵 (愛知大学)、石川 有香 (名古屋工業大学)、伊東 田恵 (豊田工業大学)、今井 隆夫 (愛知教育大学)、大石 晴美 (岐阜聖徳学園大学)、大森 裕實 (愛知県立大学)、岡戸 浩子 (名城大学)、北尾 泰幸 (愛知大学)、木村 友保 (名古屋外国語大学)、リーア・ギルナー (愛知大学)、倉橋 洋子 (東海学園大学)、小宮 富子 (岡崎女子大学)、佐藤 雄大 (名古屋外国語大学)、塩澤 正 (中部大学)、鈴木 達也 (南山大学)、馬場 景子 (中部大学)、藤原 康弘 (名城大学)、三上 仁志 (中部大学)、村田 泰美 (名城大学)、吉川 寛 (中京大学)

### ◆ 2019 年度 JACET 国際大会ご案内

第 58 回 (2019 年度) 国際大会は 2019 年 8 月 28 日 (火) ~ 30 日 (木) に名古屋工業大学 (名古屋市昭和区) にて開催されます。大会テーマは以下のとおりです。

「ボーダーレス」の先に — 変革する社会における英語教育

Beyond 'Borderless': English Education in a Changing Society

### ◆ 事務局移転のお知らせ

2019 年 4 月より中部支部事務局は豊田工業大学、伊東 田恵 研究室内に移転します。

〒468-8511 名古屋市天白区久方

二丁目 12-1

豊田工業大学 伊東田恵研究室内

E-mail: tae@toyota-ti.ac.jp

### ◆ 住所変更届、退会届提出のお願い

支部会員のみなさまに、紀要や Newsletter などの郵便物をお届けできない事例が増えています。お手数ですが、転居の際には、JACET 本部事務局と中部支部事務局の両方に、住所変更届をご提出ください。また退会される場合も本部と支部、両方にご連絡ください。詳細は、以下のサイトをご覧ください。

・ JACET 中部支部ホームページ

<http://www.jacet-chubu.org/>

◆ ニュースレターは会員の皆様のフォーラムです。ご意見、ご要望等は事務局までメールでお送りください。投稿も歓迎いたします。

JACET 中部支部事務局

〒461-8534 名古屋市東区矢田南 4-102-9

名城大学外国語学部 藤原康弘研究室内

E-mail: fujiwara@meijo-u.ac.jp



### **JACET-Chubu Newsletter No. 41**

2019 年 1 月 10 日発行

発行者：一般社団法人 大学英語教育学会

中部支部 (代表) 村田泰美

編集者：藤原康弘 佐藤雄大 北尾泰幸